



G5を編む



中邑光男

国語辞典の編纂、編集者をテーマにした映画である『舟を編む』を見た学生から尋ねられた。「どうして大学の仕事を辞めて、辞書編纂に専念しないのですか」

「日本では、フルタイムの英和辞典の編纂者は原則として存在しない。辞書編纂者は学校で教えながら、作業にあたらざるを得ないんだ」

しかし、と思う。私を含む G5 の編纂に携わった多くの英語教員は、この事実を辞書編纂の「足かせ」ではなく「跳躍板」としてきたのではないか。生徒・学生を指導する際に、彼らが発する「質問」や、教員の頭に浮かぶ「修正案」を積極的に編纂作業に生かしてきたのではないか。実際、G5 には、生徒・学生の声を念頭において G4 の記述を改良した箇所が少なくないのである。

本稿では、改良点のいくつかを取り上げ、G5 がどのように利用者の声を取り込んで編まれたのかをたどっていきたい。

■「G5を編む」第1話：evening と nightの違いについて

言うまでもなく、学習者は night を「夜」、evening を「夕方」と覚えている。私は「ではどうして女性は evening dress を『夕方』だけでなく『夜』にも着るのか」と学生に尋ね、G4 を調べさせてきた。

G4 では、night は「日没から日の出までの間」、evening は「日没から就寝までの間」と定義し、「ある時を evening と night のどちらととらえるのかはその人の主観による」と説明する。この説

明を読んだ学生が「この『主観』とはどのようなものなのか」と質問した。いい質問だ。

そこで G5 では「(night は) 特に就寝前のくつろいでいる間や寝ている間を指す。日没から就寝までの活動している間は evening と呼ぶ」との注記を与えた。これにより、学習者は、例えば宿題をするのに忙しい夜の時間は evening, リラックスしてテレビを見る夜の時間は night と呼ぶことがわかるだろう。私の学生も「社交などのために忙しい夜の時間に着るドレスだから、evening dress と言う」と分かってくれるだろう。

■「G5を編む」第2話：at と forの違いについて

学生から「シンガポール航空機のモニター画面で、『大阪の現地時間』が Time at Osaka と書かれていたが、どうして Time in Osaka とならないのか」という質問を受けた。

G4 はそのような疑問に答えを見出す助けとなることを得意としている。学生に G4 の「大都市でも地図上の一点、寄港地・乗り換え地点として見た場合は at がふつう」という語法情報を調べさせた。(ただし、「寄港地・乗り換え地点」は分かりにくい。G5 では「電車や飛行機の乗り換え地点」と修正した。)

このように地点・場所を表す at には詳しくあった G4 だが、at の語義 12 の用例「sell these things at [for] ten dollars (each) これらを (1 つ) 10 ドルで売る」では、at と for の違いを明示的には説明していない。at は「数直線上の点を示す」という一般的な注記を示しただけだ。この点に気

がついたのは、私がビジネス英語の授業の準備をしている時だった。言うまでもなく、価格の示し方はビジネス英語で重要な表現だ。学生から質問されるのは時間の問題だ。

そこでG5では、それぞれの前置詞の基本的な意味に関連させて「at は値段を尺度上のある1点ととらえ、for はある金額で等価交換することを意味する」とこの違いを説明した。これに加えて、授業では「at は単価を述べるのに、for は合計金額を述べるのに用いられる傾向がある」と追加説明するつもりだ。

■「G5を編む」第3話：thinkの文型について

留学を希望する学生が、書いた英語を見てコメントがほしい、と言ってきた。彼の英文を見ると、普通よりも難しい語彙や構文を使い学習成果を披露しようとしている箇所があった。例えば、I think that he is wrong. と書けばいいところを、I think him wrong. と書いている。「このような日常的内容を書くのにわざわざSVOCを持ち出す必要はない」と指導した。

ところが、G4のthinkの語義2に次の用例がある。「She ~s herself pretty [a pretty girl]. 彼女は自分のことをかわいいと思っている(=She ~s that she is pretty.)」この言い換えを見た学生は「この説明から考えると、やはりI think him wrong. はI think that he is wrong. と同じではないでしょうか」とさらに質問してきた。

私は、G4の「この辞典の使い方」にある「等号(=)はまったく等しいという意味ではなく、むしろ≒ということ」を説明した上で、She thinks herself pretty. と She thinks that she is pretty. の違いを説明したが、学生は釈然としない顔をしている。それもそうだろう。そもそも「この辞典の使い方」を読んだことのある学生に今まで会ったことがない。

そこでG5では、She thinks herself pretty. と She thinks that she is pretty. では、「that節を用

いる方がふつう」という注記を加えた。(同様の注記は、acquaintance, advise, confess などでも加え、表現の際の助けにしたつもりだ。)これにより、この学生はI think that he is wrong. という文型の文を積極的に書くようになった。次の段階では、I think him wrong. の文型は、どのような場面で使うのかを指導しよう。

■「G5を編む」第4話：had betterの発音について

had better が文脈によっては「強い忠告・命令・警告・脅し」などを表すことがある、という点は、「総合英語」の参考書にも書かれている。そのために、「You had better ... はあまり使ってはいけないと高校で習った」と言う学生が増えてきた。

そこで私の授業では、一歩先を行くために、had better を含む文のイントネーションと忠告・脅しとの関係を指導することにしている。要は、この表現を含む文を「下降上昇調」で読むと警告・脅しになると説明するのだが、それはなぜか、を説明するのは少々やっかいだ。

G4は見出し語betterの成句としてhad betterを示し、「You'd ~ do it. (㇀) そうしたほうがよい(さもないと...)、そうした方が身のためですよ《◆警告：後にor節が省略されている》」と説明している。しかし、この説明ではなぜyou had betterを下降上昇調で読むと警告を表すのかは分かりにくいかもしれない。実際私の学生はここをあまりよく理解できなかったようであった。

そこでG5では、次のように説明を追加した。「You'd better do it quickly. (㇀) ぐずぐずしないで、そうすることだな《◆警告・脅し；この下降上昇調は後にor elseかor節の省略を含意：You'd better study harder (, or I'll fail you). もっと勉強しないと単位をやらないぞ》」

日本語でも下降上昇調が、後にことばが続くことを含意することがある。いやむしろ日本語には

そのような表現が多い。授業では、日本語の例を挙げ、学生の下降上昇調に対する理解度を深めようと思う。

■「G5を編む」第5話: help の語法注記について

『ジーニアス英和辞典』は、語法研究に基づいた情報が豊富な点が高く評価されていると言われる。しかしこの語法研究が「くせ者」だ。表現Aと、それに意味・構造が非常によく似た表現Bがあるとき、AとBの違いを説明するのが語法研究であり、それを支えるのが、ボリンジャーの唱えた「形が違えば意味が異なる」という考え方である。

ネイティブスピーカーにAとBの意味の違いを尋ねると、「違いはない」と言われることが珍しくない。しかし実はここから語法研究者の仕事が始まる。語法研究者は、ネイティブスピーカーが「1ミリ」の差もないと思う表現を、あたかも「1メートル」の差があるように示そうとする。そう説明しなければ、日本人英語学習者が、表現を本当に理解できたと思わないからだ。

しかしながら、このために、語法研究には、「表現の違いを強調しすぎる」というリスクが潜在的に存在すると言えよう。このリスクが顕在化したのが、G4の見出し語 help にある、to の有無に関してであった。

- ・ to は、リズムや文体にもよるが、S が直接「手を貸して」を含意するときに多く省略される。したがって、He ~ed me climb the stairs by propping me up with his shoulder. (階段を上るとき彼はずっと肩で私を支えてくれた) のような場合では to をつけないのがふつう。

これに対して、他の辞書や語法書では、そのような差を指摘したネイティブスピーカーはいなかった、と報告されたのだ。そこで、G5では該当箇所を次のように変更することにした。to の有無で生じる違いを強調することは避けながらも、

ボリンジャーの考え方に従って、やはり違いには言及したことに注意されたい。

- ・ [help O to do と help O do] a) to の有無はスタイルや口調によって決定されることが多い。意味のうえで to do は間接的な援助に、do は直接的な援助に用いるという傾向は見られるが、わずかな違いなのでほぼ同義と考えて差し支えない

語法情報を充実させるという作業にリスクはつきものだ。しかし、『ジーニアス英和辞典』が語法を細かく説明してきたために、日本人学習者が「英語が分かる」と感じたことも事実だ。『ジーニアス英和辞典』では今後も語法情報を充実させていかなければならないと考えている。

■「G5を編む」第6話: 新語の selfie について

今年の夏に学生をシアトルへ引率した時に、学生から『『自撮りする』を英語でどう言うのか』と聞かれた。私は自信満々に答えた。いつかこの質問が出てくると予想していたからだ。「自撮りの写真は selfie と言う。この新語は G5 に収録されている。そこから『自撮りする』は take a selfie と言うだろう。selfie はまた動詞としても使われ始めている。この動詞用法はまだ十分に英語に定着していないと判断し、G5 には載せていない」

「では、『自撮り棒』はどう言うのですか」という質問に不意を突かれた。G5 には「自撮り棒」の英語表現はない。その学生には「a selfie rod」という表現を見かけたことがあると思うが、確かなことは分からない…。調べてから伝える」と言った。しどろもどろになった。

当然のことだが、若者は新語を知りたがる。私が学生を指導している間は、このように新語のストックを拡充することができるだろう。私は、学生に感謝しなければならない。『ジーニアス英和辞典』の利用者に感謝しなければならない。

(なかむら みつお・関西大学教授, G5 編集委員)